

H-PAF NEWS

Hokkaido Performing Arts Foundation

公益財団法人 北海道演劇財団

〒064-0811

札幌市中央区南11条西1丁目ファミール中島公園1F

TEL 011-520-0710 FAX 011-520-0712

E-mail office@h-paf.ne.jp

HP <http://www.h-paf.ne.jp>

理事長の視座に立って

公益財団法人 北海道演劇財団 理事長 磯貝 圭子

斎藤歩前理事長が亡くなり、私が6月に理事長に就任して4カ月が経とうとしています。

北海道演劇財団のホームページに掲載した理事長就任の挨拶に「受け取ったバトンを手にして、今はただ前を向いて走るだけ」と書きましたが、バトンを受け取るや否や猛ダッシュの4カ月となりました。「葉桜」富良野公演と「劇後鼎談」は予想を超えるお客様にご来場いただき、演出の歩さんが不在の中、無事に公演を終える事ができてほっとしています。(斎藤前理事長をいつも「歩さん」と呼んでいたのも、ここでもそのように表記することをお許し下さい)その後も「歩さんお別れの会」の準備、10月の新作「イワンのばか」の稽古、そして12月には劇たまの新作も予定されています。どうやら年末まで引き続き全力で走り続ける事になりそうです。

私がTPS(シアタープロジェクトさっぽろ・現札幌座)のメンバーとなったのは2001年です。そこから歩さんのオリジナル作品や、シェイクスピアやチェーホフなど国内外の名作の数々に出演。国内ツアーや海外公演も経験させていただき、養成所の講師として演出を務めたこともありました。俳優として、演劇人としてこの演劇財団から沢山の恩恵を受けてきました。

その後2019年に演劇財団の理事に就任。2024年からは常務理事として仕事をする事となりました。これまでは俳優として創作の現場から演劇財団に関わってきましたが、実際に運営側として働くことで新たな景色が見えてきました。演劇制作・劇場運営・地域文化この3つの部門を兼ね備えているメリットと難しさ。そして公益財団法人として果たすべき役割など、これまでとは異なった角度から演劇財団の可能性とそれを取り巻く環境について考えることとなったのです。

そして、2024年の12月頃、歩さんから「次期理事長に」とお話がありました。最初はこの私に理事長を務まるのかという不安の方が大きかったのですが、「実際に演劇創作の現場に関わっている人間に、もう一期理事長をやってほしい」という歩さんの思いを受け、清水専務理事・西澤事務局長のサポート、そして理事・評議員の皆様のご協力もあり、この責任ある立場をお引き受けすることにしました。

「磯貝は、そろそろ新たな視座を獲得すると思うんだよ…」と歩さんに言われたことをふと思い出します。この



ような流れで、そして就任直前で歩さんが亡くなってしまったというタイミングで演劇財団の理事長という新たな視座に立つことになるとは、全く思ってもいませんでしたが…。

日々猛ダッシュで走っている状況にあり、新たな視座から見える景色を受け止めることで精一杯ではありますが、このバトンを次は誰に手渡すのかということが今後の大きな課題であると感じています。どの業界も若手の人材不足が懸念されていますが、札幌の演劇界も例外ではありません。いま私達が持っている財産であるシアターZOO、札幌座、ワークショップのノウハウ、まずはこれを維持すること。そして若い演劇人が希望を持って活動できるように環境を整えること。時にはこれまでのやり方を一新して、時代に即して改革・挑戦することが必要だと強く感じています。

来年、北海道演劇財団は30周年を迎えます。視座をぐんと広げると、古代ギリシャで生まれたとされる演劇が途絶えることなく時代の移り変わりと共に表現形式を変えながら今現在も存在していることに大いに勇気付けられます。歩さんがよく口にしていた「演劇には力があるんだよ」。この言葉を胸に我々なりの次の一步を踏み出そうと思います。

北海道演劇財団広報紙 第61号は
斎藤歩追悼特別号としてお届けします



写真家 高橋 克己

2024年11月「民衆の敵」稽古中の斎藤歩氏〜ジョブキタ北八劇場にて

新しい世代の台頭を

公益財団法人 北海道演劇財団 副理事長 秋山 孝二

1996年の北海道演劇財団設立時の記者会見で、私は神輿に乗るように理事長の北海道新聞・坂野上社長と共に副理事長として登壇し、そこには中心俳優として若き歩も確か同席していたような気がします。私自身、副理事長として設立以来14年、歩の直前の六代目理事長として6年、歩が理事長就任期間では6年間から今日まで、副理事長として永らくこの財団運営に関わってきました。

この財団は、「民間が担う公共」として全国でも珍しい存在として立ち上がり、「演劇」が地域社会にとって「公益性」を持つ意味で、その後2012年に「公益財団法人」を取得した点でも価値があります。私が理事長時代、更なる演劇財団の発展のキーマンとして、当時、東京で映画・舞台で活躍していた歩を札幌に呼び戻すお願いをしに、田淵勝利専務理事と共に数回、東京渋谷の（株）ノックアウト本社に足を運び小林勝彦社長と面談しました。小林社長からは「今が旬の斎藤歩が札幌に行くのは、彼の人生にとっても会社にとっても大きな決断、北海道として彼の活躍の場を完全に整えて欲しい」と強く言われ、私たちは確かにお約束致しますと彼を迎え入れたのです。

彼が芸術監督に就任して、財団運営の意見交換の過程で、まずは中期5か年計画を策定して演劇財団の方向性を明確にしました。それに基づいて、大胆なストラクチャ



2024年
北海道新聞文化賞贈呈式にて

リングに着手し、脆弱だった財団を改革し、法人としてかなり堅固な体質に向かう中、コロナ禍の影響を余儀なくされました。そんな挑戦の最中の2017年7月6日、東京芸術劇場シアターウエストにおける舞台『アザー・デザート・シティーズ』の公演初日、ライマン役の中嶋しゅうさんが舞台から落下し、その後、急逝しました。この状況を受けて、急遽、中嶋さんと共演経験が深く、友人でもあった歩が代役を引き受け、出演者5人で稽古を開始、わずか3日間で本番に臨み無事再開という緊急かつ困難な離れ業を成し遂げたのです。この決断の前に私に対して歩が、「演劇財団の多忙な今、代役を引き受けて札幌を1か月以上留守にしてもよいものでしょうか」と相談にきたので、私は「やってみなはれ!」と背中を押しました。

更にコロナ禍では、いち早く「劇場公演ガイドライン」を自ら策定し、演劇は「不要不急」ではなくインフラだと、万全のコロナ対策で公演を続けた姿、それはまさに演劇に生きる歩の真骨頂でした。

今、斎藤歩亡き後、札幌の演劇界は大きな転機を迎えています。これまで私は、私が経営の一翼を担っていた企業の先代経営者の逝去を数回経験していますが、社員の喪失感は埋め難い大きな存在で、自分自身も気持ちの落ち込みを逃れることが出来ませんでした。そんな時、私の友人が曰く、「亡くなることの意味合いは、新しい世代の台頭を促す先代の意思と受けとめるべきではないか」と。そうです、新しい世代の台頭、斎藤歩の我々へのメッセージはまさにここにあるのだと私は今思っています。

“平田さん、一緒に演劇財団をやらせていただきます”

一般財団法人 田中記念劇場財団専務理事／公益財団法人 北海道演劇財団顧問 平田 修二

27歳の斎藤歩君がボクにこう言ったのは、1992年5月、ロシアノボシビルスクにある国立ドラマ劇場クラスヌィファケルでのことでした。

当時、北海道演劇財団設立の準備をしていたが、その事業の中心はプロの演劇創造システムを創ることだった。東京の専門家の助けを借りるしかないと判断した我々は、常任演出家に松本修さん（文学座を経て劇団MODE）、プロデューサーに柴田英紀さん（劇団犀座、俳優座劇場など）になってもらった。

ただ、札幌から一人だけ、斎藤君には加わってもらおうと思い、その数か月前、財団設立の趣旨、創造体制のイメージなどを話したのだが、「すみません、ボクはボクでやりますので…」と断られた。ボクはあきらめず、当時交流していたロシアノボシビルスクの劇場と一緒に来てもらったのだ。一週間、ここでいろいろ見た彼は、やはり一人で演劇を振興していくには限界があると感じ、冒頭の返事となった。

こうして、TPS（シアタープロジェクト札幌の略、札幌座の前身）は、松本演出家、柴田プロデューサー、斎藤アーティストの3人体制で出発しました。そして、松本さん演出の

いくつかの公演に出演したが、98年に次の転機が来た。この年、TPSは、『若草物語』で1ヶ月の全国ツアー公演を行った。東京の出演者は、公演後、次の公演現場に急いで戻って行ったが、札幌の出演者は戻る現場がない。これではプロの創造体制、創造の日常化は作れないと考え、東京の助けを借りるが、札幌メンバーで運営体制を作ろうということになった。

こうして、1999年、斎藤チーフディレクター、平田チーフプロデューサーの二人責任体制とし、スタジオと養成所を作った。ところが、松本さんの東京での演出舞台で共演した柄本明さん、佐藤信さんらが、斎藤君の才能を高く評価し、結局、彼は口説かれて2000年東京へ移住することになった。それ自体はとてもおめでたいことだったが、ボクは芸術面の指導者（チーフディレクター）が常駐していない劇団のプロデューサーになってしまった。いろいろ相談したが、結局、ボクは、年1作品新作を創ることを約束してもらった。それが結局は、君の財産になるからと。そして、『冬のバイエル』『アンダンテ・カンタービレ』『西線11条のアリア』『春の夜想曲』などの名作が生まれた。若

雪虫の舞う石狩浜、手稲の山の頂きで。

レッドベリースタジオ代表／公益財団法人 北海道演劇財団監事 飯塚 優子

かつて札幌で発行されていた「さっぽろタウン情報」という月刊誌に、私は「ミーハー劇通信」という連載を持っていた。その1988年1月号に、札幌ロマンチカシアター魴鯉舎公演を観た感想を書いている。斎藤歩作・演出の旗揚げ公演である。一部を引用する。「（1987年）11月22日魴鯉舎公演『瓶中闇雲捕物帳』。ポスターには第61回興行となっているが、実は旗揚げ公演。明かりが落ちて、強烈なロックで化け物じみた登場人物たちの顔見せ行進。一転して遠くから澄んだ女の子の歌声。声の聞こえてくる側の幕が上がるとその向こうにズーッと向こうまで空間が広がっている…」

赤と黒と金で刷られたシルクスクリーンのポスターには、歩さんのあの手書き文字でこう書かれている。

紫赤色の肉体に群青色の羽根広げ、三本ヒゲで海底を歩き
雪虫の舞う石狩浜、ついに上陸！
深海魚魴鯉 翔け魴鯉 火を吹け魴鯉
手稲の山の頂きで
茜の夕日を背に受け「俺の出番だ!」と叫べ魴鯉

魴鯉舎が旗揚げした1987年とはどんな地点だったか。前年1986年4月「駅裏8号倉庫」活動終結、同年「札幌本多小劇場」オー

ブン。9年後の1996年北海道演劇財団設立、「札幌演劇シーズン」がスタートしたのは25年後2012年である。

魴鯉舎は、1988年から91年にかけて「星影の円舞曲」「爐（ベチカ）」「忘れ咲き彼岸花」「薄紅の凡歌」「かかし」「秒時計」と立て続けに公演を打った。半年アルバイトで稼いで、半年芝居をつくる。もうそれでは追いつかない。自分の時間を24時間全部芝居に使いたい。歩さんがそんな風に考え始めていた時期、おそらく90年秋頃のことだと思う。当時私は88年10月に生まれた娘を抱えてフリーライターに復帰し、保育園向かいの古いビルに4畳半の仕事場を借りて毎日通っていた。そこにふらりと歩さんが訪ねて来てくれたことがあった。この先、芝居中心で生きていくにはどうしたらよいか、というような話をしたと思う。この時期を経て歩さんは覚悟を固め、プロの道へ進んだ。その後の歩さんの歷程を思うにつけ、近年の粉骨砕身の活躍もさることながら、あふれる思いを携えたあの頃の姿ばかりが思い出されるのはなぜだろう。

演劇を観る楽しみは、結局のところ俳優を見る楽しみなのだ、ということを実感させてくれたのは歩さんだ。曰く「手足もがれてみなければ分からない」。どういう意味なの？とたずねたことがあるのだが、回答を理解

かった彼は、時には東京から日帰りで演出をしに来た。東京で暮らし、俳優をしながら、北海道から世界を眺め、ローカルでありながら普遍性を持つ作品が生まれる背景となったと考えます。提案者のボクの密かな誇りでもあります。

その後も、数々の困難に直面し、彼との真剣で切羽詰まった相談は続きますが、紙面が尽きました。ただ、彼はいつもその相談を正面から受け止め、逃げませんでした。いつしか、演劇とは関係ないことで悩み事に直面した時、斎藤君ならどう思うのだろうと、考えている自分に気付くことが多くなりました。

ボクより17歳若い斎藤歩君、亡くなる順番が間違っています。ただ、彼にシアターZOOより広くて機能が優れた劇場を用意するのが、プロデューサーとしてのボクの目標の一つだったので、ジョブキタ北八劇場で、最後に三作品（『劇後鼎談』を含め）を創ってもらえたのがせめてもの慰めです。



2005年「亀、もしくは…。」ハンガリー公演 市場にて



できていない。舞台上立つ俳優の強靱さに関わることのように。『ゴドーを待ちながら』や『西線11条のアリア』の冒頭、舞台上に居てセリフのない歩さんを見るのは本当に面白かった。

昨年末、メッセージのやり取りでこんなことを言っている。「札幌の演劇人たちがもっと〈知識〉というものの重要性に気付いてくれないと、〈演劇とは知の仕事である〉ということを痛いほど思い知らないと、何時までたっても変わらないですよ」

ラジオ番組にゲスト出演してくれた時には「北海道は文学の宝庫、札幌の演劇はもっと文学との接点を持つべき」とも語っている。

今後も折りに触れ、歩さんの言葉が私たちの行く手を照らしてくれるだろう。これからも一緒にね、歩さん。

君とは30年間で26本の芝居を作ったんだよ

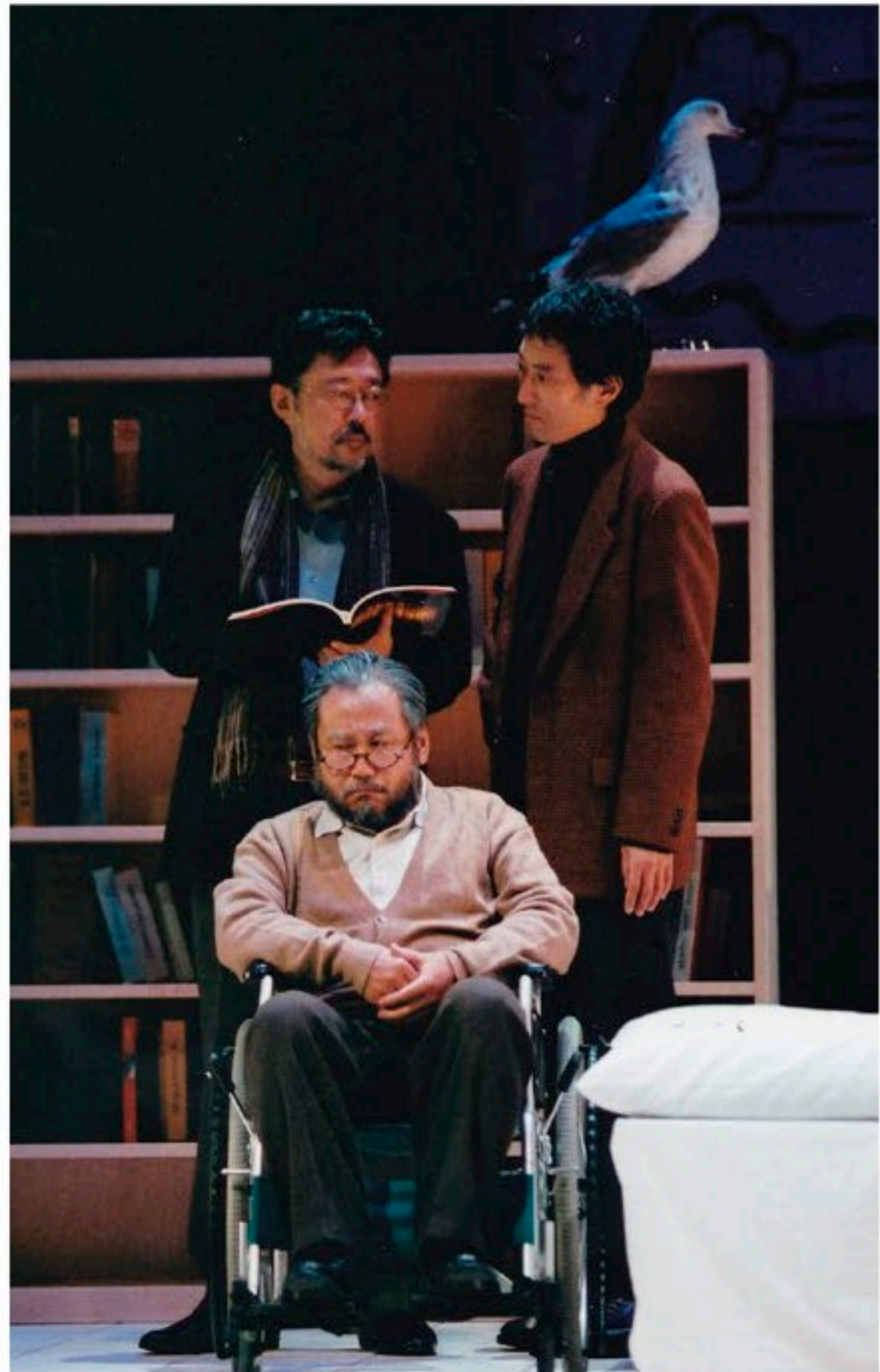
演出家／MODE主宰 松本 修

古いチラシの入ったファイルを開ける。『わたしが子どもだったころ・オホーツク版』、『MODE'95 北海道・東北ツアー』とある。裏面の真ん中にキャッチコピー「ただこの星だけがあくせくやっている」とある。あっちの世界に行ってしまった君はきっとそんな気持ちで地上の私たちを眺めているのではないだろうか。

この舞台が斎藤歩との最初の芝居作りだった。北海道演劇財団設立準備会とMODEの共同製作。端野町(現北見市)に二週間滞在しての稽古、町民参加者とのワークショップ、6月9日端野町グリーンホールでの初日。その後7月9日の山形県遊佐町まで14か所での公演。そうか、ちょうど30年前の6月は君と一緒に旅の空の下だったんだね。30年後の今年の6月は君がいなくなった札幌の夜、君と飲み歩いた辺りをふらふらと彷徨いました。雨も降ってないのに街の灯りが曇りました。『わたしが子どもだったころ』は、普通の人たちの普通の生活を淡々と描き、それを宇宙からの、そして死者たちからの視点で語る芝居なのだが、それが君との初仕事だったとは。私より十歳も若い君が、宇宙からこの星を眺めているなんて。



2013年「審判」ヨゼフ・Kを好演



2010年「かもめ」ラストシーンより(松本修・斎藤歩・小島尚樹)

あれはいつだったか、真冬の端野町で、札幌から演劇財団の新堂さん、東京から私、そしてインド!から帰国して成田から女満別空港に飛んできた歩が落合った。翌日にグリーンホールで開催されるワークショップか講演会だったと思う。ホテルに入る前、つい先ごろ端野にオープンした温泉に入ろうということになった。小振りだがなかなか素敵な町立の温泉施設。湯に浸かりながら歩が言うには「インドは連日40℃くらいの気温だった。今日の端野は何度ですかねえ」。隣にいた町のオッチャンが「今は氷点下10℃くらいだろうけど、明日の朝はマイナス20℃くらいになるかもなあ」と教えてくれた。「おお、温度差60℃かあ!」と三人で笑いあったことがなぜか記憶に残っている。めっちゃめっちゃバレル雪道を歩いて帰った。もちろんホテルではアルコールを注入し、早目に各自の部屋に戻った。次の日の仕事は楽しく済ませ、私は東京へ、歩と新堂さんは札幌へ向かった。数日後の君からのメール。「大変な高熱で四五日、寝込んでました。温度差には気をつけましょ」と。今年の夏は北見地方が40℃になったよ。

1997年、私と歩と小嶋尚樹の三人は『孤独な惑星』という戯曲に出会った。アメリカの大都市にある地図屋を舞台にした二人芝居。歩と尚ちゃんはゲイ。エイズの流行に怯えながら、世界地図や宇宙から見た地球の写真の話を。HIVの検査を恐る恐る受け、幸運にも陰性だった尚ちゃん。「勇気を出して検査に行っこいよ」と勧めていた歩

が、ラストシーンに幽霊として登場する。彼は感染して先に死んでしまったというストーリーなのだが、この芝居を二人は実に軽妙に演じてくれた。アメリカから観に来てくれた作者のステイブン・ディーツも喜んでくれた。札幌でも初演は今はなき五番館の赤レンガホール、そして二年後にこれも今はなき琴似の煉瓦倉庫コンカリーニョ。函館港の赤レンガ倉庫でもやったなあ。この劇中のセリフ「生きた証はきっと残る。わたしたちは人間だから、古代の都市ではないのだから」。イヨネスコの『椅子』という戯曲のセリフから引用された。今、それをさらに引用しよう。

君がやった仕事は残ります。共に芝居作りした人の中に、劇を観た多くの人の中に。演劇における君の功績はこれからの札幌や北海道の舞台の中に垣間見えるに違いない。

私は街の灯りの下、しばらくはうろつき回ります。君の影を探して。



歩と渋谷にて 2025年2月



1995年「若草物語」楽屋にて(上左から松本修、斎藤歩)

本物の演劇人

公益財団法人 北海道演劇財団評議委員／おびひろ市民ラジオ プロデューサー 松崎 霜樹

斎藤歩はもうこの世にはいない。寂しいなあ。

はじめて会ったのは薄野の奥まったところにある一声(いっせい)というおでん屋だった。8人も座れば満席のL字型のカウンターで「とにかく芝居で食いたいんです」と彼は言った。何杯か飲んでいい気分になった頃、仕事を終えたホステス達が隣に座り、やがてきっぷのよい姉さんに襟首をつかまれ去っていった。「また今度、へへへ」という言葉を残して。35年も昔のことだ。

「演劇を職業に」という合言葉で、高校演劇時代から知っている山野久治も誘いA.G.S(札幌舞台芸術家協議会)という団体をつくった。初顔あわせの時、たらば蟹を持ってきた山野と三人で朝まで飲んだ。何を語りあったのかは三人とも何も覚えていない。

初代代表は私だったがラジオの仕事が忙しくなり二代目に斎藤歩が就任した。その前の年に1年間かけて彼は札幌市内のほぼすべての劇団に顔を出し、稽古をのぞいたり客演をしたりした。「だめだね、このマチには本気な奴はいないね」と言った。

「亀もしくは居酒屋の中のきちがい」とい

うハンガリー作家の短編小説を「脚本にしろよ」と私は提案した。コンパクトだから地方都市にも売りに行ける、と。「亀もしくは…」は道内ツアーでなかなかの好評を得た。すると彼は「東京国際芸術祭というところからオファーが来てるけど行く?」と言う。いつの間に? なんとというマネージメント力。驚いた。

「亀もしくは…」は池袋の芸術劇場で公演された。初日で東京の目利きの観客に評価を得たのか楽日の舞台は衛星放送されることになった。斎藤歩の事実上の東京デビューとなった。北海道からやってきたA.G.Sってすごいらしい。楽屋の洗面台で鮭をばらしてイクラ丼を劇場スタッフにふるまったことも噂になった。

大通りのマンション地下にあった稽古場に「A.G.Sスタジオ」と名付けた俳優学校を開校した。「ジ」ではなく「ヂ」だとゆずらない。彼独特のネーミングセンス。「本物をめざす演劇人來たれ」のコピーがきいたのか思いのほか生徒は集まった。その中に財団理事長になった磯貝圭子がいたが結局今でも芝居を続けているのは彼女だけだ。

A.G.Sは斎藤が東京に行くことによって



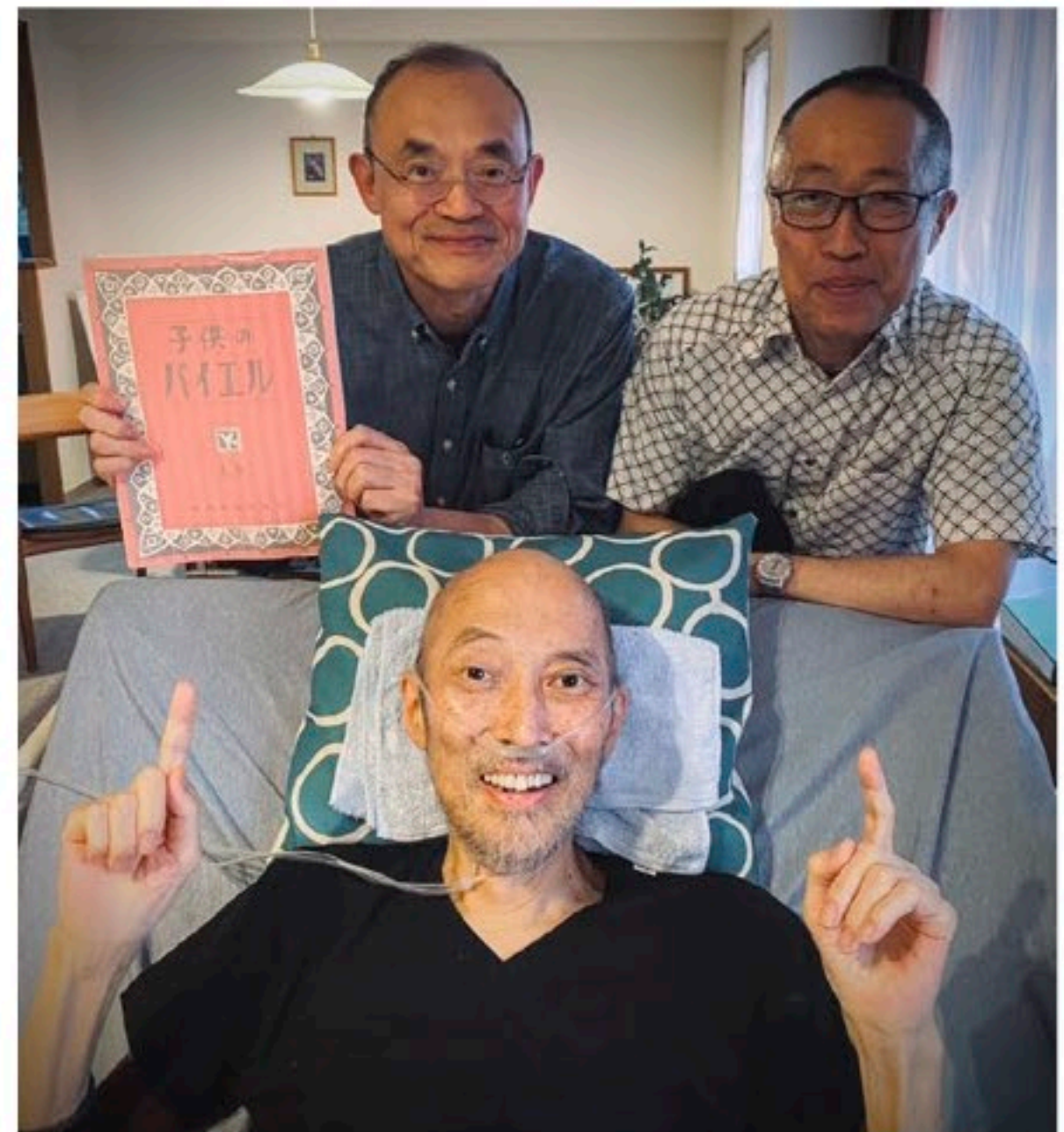
1996年「亀、もしくは…。」初演

消滅したが、札幌演劇財団(北海道演劇財団の前身)の付属劇団TPSのチーフディレクターに就任したことによって頻繁に帰って来ていた。

ある日、結婚するといって西田薫を連れて来た。彼女も北海道出身だという。私が発起人になって米風亭でささやかな祝宴をあげた。たぬき小路の宮分刃物店で出刃包丁を買って結婚祝とした。「浮気したらこれで」と言ったら新婚の嫁は目をまるくした。HTBのドキュメンタリーを見たらまるでラブストーリーじゃん。杞憂だった。

A.G.Sスタジオの「本物をめざす演劇人」は斎藤歩のコピーだ。自分にまったく嘘をつかないスケールの大きな痛快な男だった。

そちらの居酒屋でまた朝まで飲もうな。



島倉君と斎藤歩と私(2025年5月30日 斎藤歩自宅)

さいごまで泣き言を漏らさなかった歩は、何だかカッコよかった。まあもともとカッコいいのだが、なんか違うぞ。死の床までTVカメラを入れて引くに引けなくなったのではないかと私はにらんでいるのだが、最後まで役者としての生をまっとうしたというのなら、それはそれですさまじい。

斎藤歩はさいごの日々に、あの頃と同じようにどうでもいい時間をいっしょに過ごしてくれたんだろうと思うことにした。聞くことができなかった質問の答えは自分で考えることにした。いい芝居は、如何ようにも考える余地があるものだ。

斎藤歩はあんまり変わってなかったかもしれない。いろんな意味で口惜しくてならない。

脚本・演出家／座・れら 戸塚 直人

死と歩

斎藤歩に聞きたかった。「死ぬのは、こわくないのか?」と。でも聞けなかった。

「医師からあと半年だと言われている」と言うときも、そしてひどく痛がっているときも、死ぬことは歩とはちがう世界で起こることのようだった。そうならこっちもそう接するしかない。

僕は怖い。その時何が起こるのか?その先に何があるのか?わからないから怖い。ありとあらゆるものとお別れしなければならぬことをどう考えていいかわからない。

だから(卑劣な気もしたのだが)西田さんに聞いてみた。歩は不安とか語っていないの?と。薫さんは「寂しいと言っている」と言った。「みんなに会えなくなるのが寂しい」と。…そうなのか。

いっそう聞きたくなった。ほんとうのところどう思っているんだ?

4月に入院した菊水のがんセンターで見た歩は、もうダメだと思った。それでも復活した歩に、疑問をぶつけるチャンスだと思った。でも言い出せないまま、どうでもいい話を散々したあとで逆に歩に聞かれたのは「もう(病院から)出られないと思ってた?」。正直に答えた。すると歩は、病院スタッフから泣きながら「歩さんもダメだと思ってたのによかったね〜」と言われたと

笑っていた。やっぱり聞けなかった。

22歳のころ、歩と横山敏宏さんが暮らす北15条の崩れそうな一軒家に転がり込んで、生活を共にしたことがあった。「ほーほー庵」という、まあ「シェアハウス」。学生その他が溜まり淀み、ありあまる時間を無為に過ごす空間だった。連日そこに人が集い、ごはんを食べて酒を飲み、わめきささやき泣き笑い歌い喧嘩してまたごはんを食べていた。僕らは若く、あと先考えず、愚かで怖いもの知らずだった。僕はそんな仲間と環境が愛おしく、どうでもいいこんな時間がずっと続けばいいなあと思っていた。その後、時の重みは若さや愚かさを剥ぎとり、成果とか結果とかが生活を侵食し、やがて分別臭さが体に染みついていった。

斎藤歩は5月に退院して、下半身が動かなくなったという割に元気なんで、そのうちまた歩き出すだろうなと樂觀していた。あいかわらず例の質問はできなかったけど、このままのこんな時間もいいんじゃないかと思い始めていた。「また来るね」と言って別れた。

だから6月10日にベッドの上で目を覚まさない歩に会ったときも、翌朝、息をしない歩に会ったときも、「何やってんのよ」と、歩と自分に思っていた。

「葉桜」帯広公演 2025年6月6日、7日 平原通り小劇場

NPO法人札幌座くらぶ理事長 有田 英宗



(写真:高橋克己)

陽光きらめく帯広で「葉桜」を見た。札幌座の磯貝圭子さんと熊木志保さんの二人芝居、2019年の初演から人気が高い。帯広は初演だった。

岸田國士の原作

原作は岸田國士で大正15年(1926年)初出、斎藤歩さんが現代の札幌に設定を換えて作、演出した。歩さんの作品の諸系譜に二人芝居がある。私は「葉桜」のほかに磯貝さんと林千賀子さんが出演する二作品を見ている。

母と娘のやるさな

原作から99年以上たった現代でも、女親と適齢期の娘のやるせない「間柄」は変わらない。

父親はすでに、みまかっている。「葉

桜」は哀しみをはらみつつ、滑稽味が身上だ。磯貝さんのコミカルと熊木さんの逡巡のやりとりは演るたびに深まっている。変貌している。帯広の二人は香気を放ち、お客様からはたびたび上品な笑いが起こった。

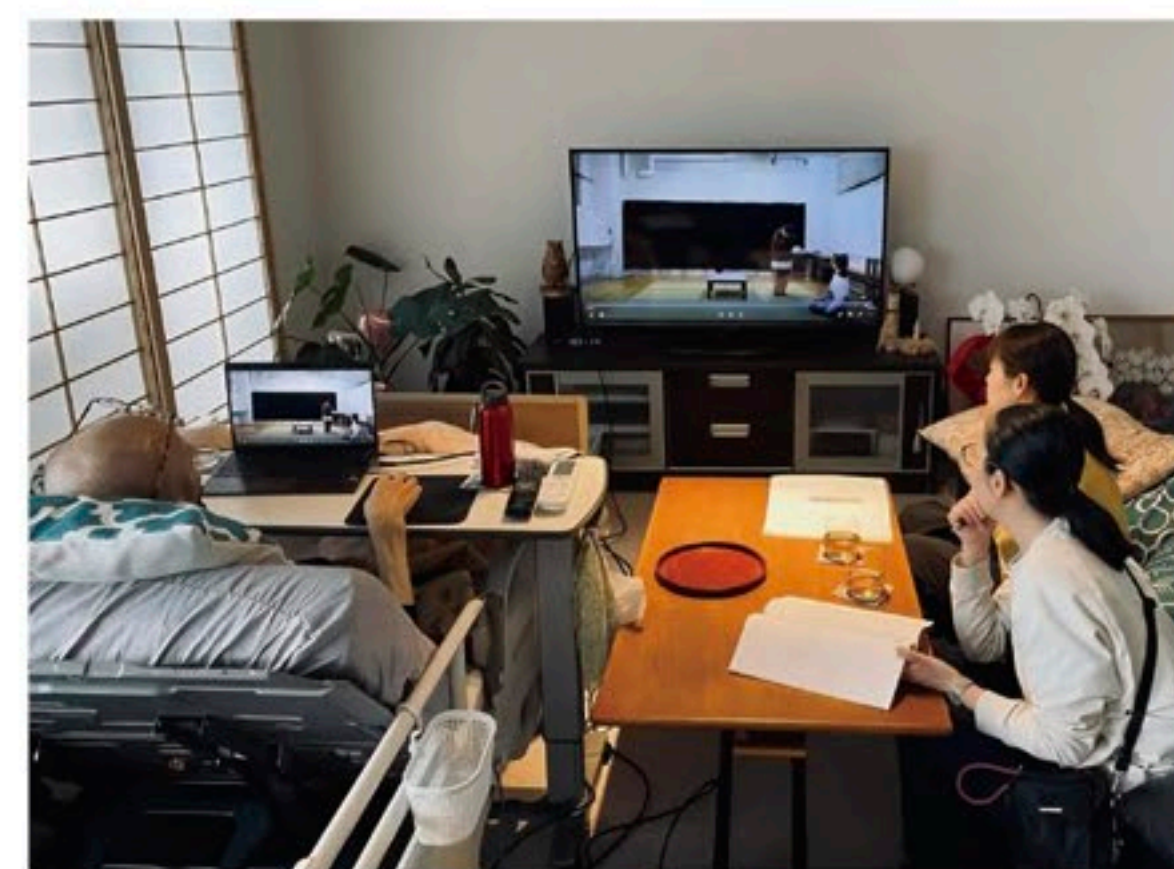
斎藤歩さん生前最後の演出

斎藤歩さん、もって冥すべし。帯広公演の4日後、斎藤さんは帰らぬ人となった。生前、最後の演出作品となった。

私は平原通り小劇場に前乗りした、スタッフ、キャストと一緒にいた。到着の写真を熊木さんが、斎藤さんへ送り、斎藤さんが拡散する。清水さんや磯貝さんが仕込みに苦心を重ねる間も、斎藤さんと連絡をとり合い次回作「劇後鼎談」の重要な決定をしていた。

帯広「平原通り小劇場」は80席の新装空間だ。2024年6月にこけら落とし公演をおこない、斎藤歩さんの不朽の名作「亀、もしくは…。」が上演された。そして、2025年6月「葉桜」。

葉桜はエゾヤマザクラであろう。そう想いたい。葉桜は寂しからず。Stand by Me.



斎藤歩の自宅で演出を受ける葉桜出演者

『劇後鼎談』～自由自在にスケールを操る斎藤歩さんの妻さ

札幌演劇シーズンプログラムディレクター／株式会社tatt 代表取締役 小島 達子

2025年は私が斎藤歩さんから札幌演劇シーズンのプログラムディレクターを引き継いで初のプログラム選考となりました。そこで選定した『劇後鼎談』。当初は札幌座の別の作品をシーズンでやりませんかとご相談しました。ですが、それは、かなり昔に創られた作品だったため、歩さんからはそれはいまの時代に合わないからと、『劇後鼎談』を提案された訳なのですが、私の中で若干の不安はありました。歩さんの持ち味でもある、どこまでも自由で天才的な想像力ゆえに妄想と物語がどんどん膨らんでいく様が、『劇後鼎談』について言えば、面白いのですが少々混沌ともしており、大勢のお客様さまに伝わるのか…?しかも、初演のシアターZOOよりも大きいジョブキタ北八劇場で…?と。

しかしそんな心配は杞憂に終わりました。初演時の5倍ほどのお客様が満足げに帰られていく姿を見て、歩さんの妻さを改めて実感したのです。歩さんとは、私が時期プログラムディレクターになることが予定された頃から数年にわたり、作品選びについてたくさんのお話をしてきました。その中で度々、初演時と会場の規模が異なる作品選びに懸念を訴える私に「あれは大きい会場です。やった方がずっといい芝居なんだよ」と。そしてそれはいつも、なるほどという結果となりました。

演劇をいつも、我々の目に見える範囲を遥かに超える遠くから、また

は近くから、多方面からつぶさに眺めていた歩さんの射距離の広さを知る度に、自分の想像力と経験値と読解力の無さに落ち込みました。大変勉強させて頂きました。

歩さんの創る作品は『劇後鼎談』に限らず、劇場によって印象を自在に変えるものが多いような気がします。アンダーグラウンドとオーバグラウンドを行ったり来たり。歩さんは脚本を書く時にそれを意識していたのかもしれないし、そうではないのかもしれない。今度一緒に飲む時に聞いてみよう、と思ってももう叶うことはありません。

歩さんの書く作品の舞台は、すすきののはずれのアパートの一室から、小さな街の電停、宇宙船の中、広大な玉ねぎ畑、とそのスケールはとて幅広い。広い宇宙の片隅で行われるちっぽけな生命体たちの営み。それらのあらゆるものはたらきに対して、やん

ちゃな子供のように冒険心を働かせてニヤニヤしながら脚本を書いている歩さんを思うと愛おしくなりません。そして『劇後鼎談』は、まさにそんな風にして書かれた作品だったのだと思います。

この作品がシアターZOOから飛出してジョブキタ北八劇場で上演してどうなったか。目撃して頂くことは叶いませんでしたが、歩さんの残した作品は札幌の演劇界にとっての貴重な財産であり、けして消えることはありません。

最終的に歩さんへの追悼のようになっしまいました。

歩さんの天体望遠鏡で、皆で地方ツアーで土星を見た時の、子供のように興奮していた歩さんの姿を忘れません。ずっと尊敬しています。豊かな時間を有難うございました。

(写真:高橋克己)



2025年度上半期ワークショップ事業

公益財団法人北海道演劇財団 芸術監督 清水 友陽



「コミュニケーション・ワークショップ」

北海道演劇財団では、この数年でワークショップ事業の見直しを図り、講師の間で「新たなプログラムの目的」を共有してきました。ワークショップの現場では、他者と関係を築かねばならず、そこにどうしてもリスクが発生します。そのリスクを負ってもチームのメンバーが安心して協働することの体験が目的であり、そのためには「失敗しても許される場づくり」が必要となります。どのようにスタートするか、入口が重要になってきていると感じます。持続可能な開発目標を構成する要素として、教育機関などではウェルビーイングが重要視されています。それぞれの人にとって「よい状態」は異なり、社会で他者と関わる中で、初めて立ち現れてくるものであるという考え方は、これまで私たちが実践してきたワークショップの現場と親和性があります。私たちのプログラムが目指しているものは、結果としての評価だけでなく、「よい状態」を共有しながら協働するプロセスであると考えています。これを達成するための導入部分を、より丁寧に進めています。

2025年度上半期は、4月に毎週、企業の新人研修や中学校、高校のスタートアップ・ワークショップに出かけまし

た。前述したように、他者との関係を築き、協働しながら答えのない課題に取り組むプログラムを実施してきました。現場に出かけて行って感じたのは、場を壊すような振る舞いや意見が少ないことです。やりやすいといえそうですが、波風が立たないように、その場をやりすごすような参加者が多いと感じました。これまでも、そういう参加者はたくさんいましたが、それが「つまらない」とか「無関心」といった表現ではなく、知識としてリスクを回避することを学び、それを実践しているために積極的には関わらないという態度にも見えるのです。ハラスメントの問題や、コンプライアンスの問題が取り上げられ、それに対する教育も進んでいます。知識として蓄えるだけでなく、想定した通りには動いてくれない生身の人間と、身体を使いながら新たな関係を築くことで、コミュニ

ケーションの力を身に付けてゆくことが必要な時代となっています。

「失敗してもやりなおせばいい」「自分の考えをいったん置いておき、きちんと傾聴する」「少数派の意見のなかにも、もしかすると面白い発見があるかも知れない」。これまでやってきたことと同じ内容ではあるのですが、それをどのようにワークショップという場で体験してもらうとよいのか。そして、ワークショップが終わった後に、少しでもチームの関係性の風通しがよくなっているためには、どんなことができるのか。これからも、コミュニケーション・ワークショップについてどのようにアプローチしてゆけばいいのか考え続けることが必要だと感じた上半期でした。そして、それが私たち講師にとって、人間を扱う職業である、俳優修業につながっているんだなということも実感しているところです。

小さなことから……。岩本・佐藤法律事務所

弁護士 岩本 勝彦 弁護士 佐藤 昭彦
弁護士 中澤 拓朗 弁護士 増田 翔

〒060-0042 札幌市中央区大通西9丁目キタコーセンタービルディング6階
電話：011-281-3001 FAX：011-281-4139

札幌ハムプロジェクト若者ワークショップ公演『サムライヌード』報告

札幌ハムプロジェクト 代表 すがの 公



札幌ハムプロジェクトが若者向け演劇ワークショップ公演『サムライヌード』を、2025年6月12～15日にかけてシアターZOOにて開催しました。1ヶ月の稽古で発表公演までつぎすむハードなWSです。僕としては2回目のWSだったので前回の経験値でカル〜く乗り切ろうとしてましたが、そうはいかなかった(笑)。

このWSは舞台芸術の創造と鑑賞の魅力を若者に体験してもらうことを目的に、身体と言葉のみで物語を紡ぐ演劇表現に若者たちが挑戦するものです。10～20代の俳優・スタッフを対象に公募され、定員10名に対して21名集まっちゃいました。参加費は5000円(1ヶ月!安い!)。応募開始から3日で定員を超え、若者たちの演劇への関心の高さがうかがえます。

僕も自身の年齢を踏まえると、そろそろ社会貢献というか「ともあれ演劇に

恩返しをする人生も歩まねば、我々は地獄行きだ」と思い立ち、昨年からの「1ヶ月の若者WS公演」というのを開始しました(2024年9月BLOCH)。僕がヤングな彼らと接点を持ててなかったのですが「こんなにやりたい若いのがいるんだな」と今回も驚いています。

舞台セットなしで身体と言葉で幕末の世界を描きます。効果音も自らの口で表現するヒジョ〜に疲れる作品です。でも、演劇の原点に真正面から向き合う「やりがいがある作品」なので、若者たちにふさわしいと思っています(高校演劇でもたまに採用されています)。今時こんなに叫び倒す演劇なんて無いんじゃないかなあ。人間が本気で大声を出してるなんて『劇場』ならではの事件なので、叫べるうちは叫べばいいと思っています。けどそのうち「大きな声を出します」と張り紙を出す時代がくるんでしょうか。嫌だな。

芸術監督・清水友陽さんに何かと相談にのってもらい、劇場稽古や仕込み時間の優遇、照明器具の操作の体験などが実現。若者が『劇場』という非日常空間で稽古を重ね、最終的に観客の前で成果を発表するというプロセスを踏めたことがめちゃくちゃ良かったです。劇場が単なる上演のハコではなく、創造・育成・交流の拠点として機能するのはスバラシイと思います。なにやかにやで1ヶ月間、劇場空間を活用した創造を体験。観客からは「自分も挑戦したい」との声が寄せられ、舞台芸術への参加意欲を喚起。百点でした。最終的には。



ただ!今回は風邪に悩まされた!子供は風邪を引くもんですが、地下の空間に長時間、21人が叫び倒すという現場では、稽古中扉を閉め切る必要があります。どうしても換気の面がおそろそかになります。一時期は風邪で降板の文字もちらつきました。今後の課題。

札幌ハムプロジェクトは、今後も劇場を拠点とした創造的な事業を展開し、若者が演劇の世界に一歩踏み込む機会を提供していく方針です。今後も多くの若者たちの記憶に残る『強烈な劇体験』となるだろうと信じて、継続してみようと思います。

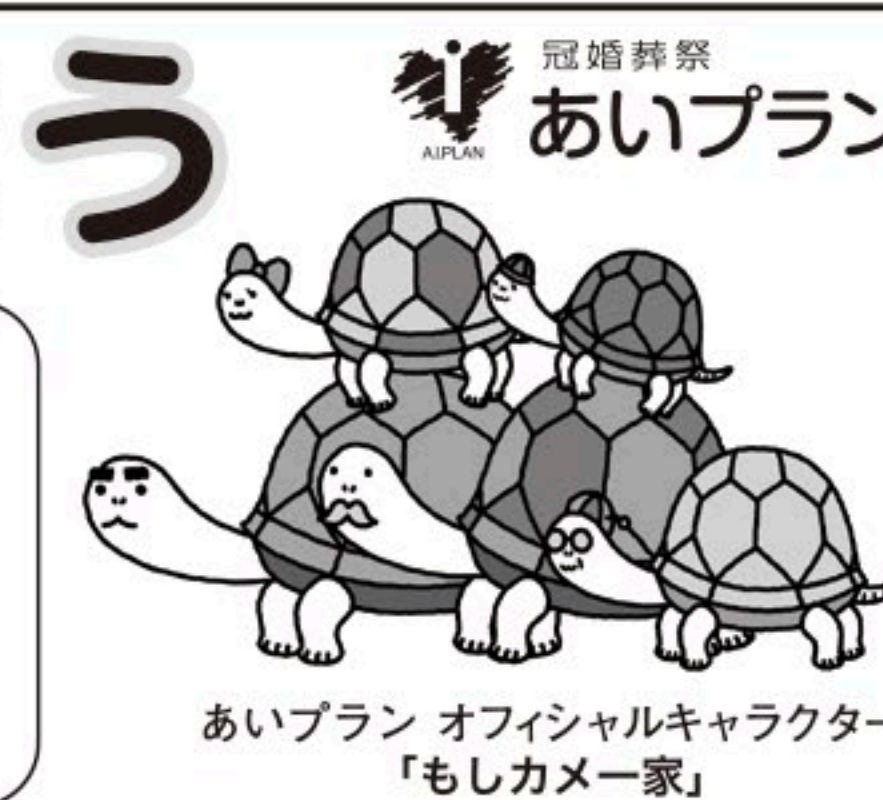
もしものために積み立てよう

結婚式や葬儀など、人生の節目に訪れる大切なセレモニーをあいプランの互助会システムがしっかりサポート

お問い合わせ・ご相談窓口

0120-335-924

▼オンライン入会はこちら



あいプラン オフィシャルキャラクター「もしカメ一家」

演劇の企画・制作事業

《演劇公演》

- 札幌座Pit「葉桜」
(原作:岸田國士／脚色・演出:斎藤歩)
5月30日(金)～6月1日(日)札幌公演(4回公演) [シアターZOO]
6月6日(金)～7日(土)帯広公演(2回公演) [平原通り小劇場]
7月19日(土)富良野公演(1回公演) [富良野演劇工場]
- 札幌演劇シーズン2025 札幌座公演「劇後鼎談」
(作・演出:斎藤歩)
8月9日(土)～16日(土)(8回公演) [ジョブキタ北八劇場]

《ワークショップ》

- 株式会社ケン・ホテルマネジメントキャビン北海道「新入社員ワークショップ」
4月3日(木)(1回) [扇谷記念スタジオ・シアターZOO]
講師:磯貝圭子
- 株式会社モロオ「新入社員ワークショップ」
4月8日(火)(1回) [株式会社モロオ 会議室]
講師:清水友陽
- 立命館慶祥中学校1年生ワークショップ
4月9日(水)～25日(金)(3回) [立命館慶祥中学校]
講師:磯貝圭子、西田薫、熊木志保 ほか
- 厚別高校スタートアップワークショップ
4月10日(木)～11日(金)(2回) [北海道札幌厚別高等学校]
講師:磯貝圭子、熊木志保、前田透 ほか
- 北星女子高等学校ルーキーズキャンプ
4月14日(1回) [北星学園女子高等学校]
講師:清水友陽、田中春彦、中野葉月 ほか
- 厚別高校2年生ワークショップ
4月17日(木)(1回) [北海道札幌厚別高等学校]
講師:磯貝圭子、清水友陽、戸澤亮 ほか
- 立命館慶祥中学校2年生ワークショップ
5月9日(金)(4回うち1回、残り3回2026年予定) [立命館慶祥中学校]
講師:磯貝圭子、熊木志保、前田透 ほか
- 札幌心療福祉専門学校ワークショップ
5月10日(土)(1回) [札幌心療福祉専門学校]
講師:清水友陽
- 立命館慶祥中学校3年生ワークショップ
5月16日(金)～7月3日(木)(5回) [立命館慶祥中学校]
講師:磯貝圭子、前田透、竹原圭一 ほか
- 紋別市社会福祉協議会職員研修
7月30日(水)(1回) [紋別市総合福祉センター]
講師:清水友陽
- 洞爺中学校ワークショップ
9月9日(火)～17日(水)(3回) [洞爺湖町立洞爺中学校]
講師:熊木志保、前田透

劇場運営事業

《シアターZOO企画・提携公演》

- シアターZOO 次世代共創プログラム「磯貝圭子俳優ラボ」
4月～8月(月2～3回程度) [扇谷記念スタジオ・シアターZOO]
講師:磯貝圭子(札幌座)
- シアターZOO 次世代共創プログラム「ZOOの小屋裏ワークショップ」
4月～9月(月1回程度) [北海道演劇財団事務所内ZOOの小屋裏]
講師:清水友陽(劇団清水企画)
- 言の葉の杜(神戸) [提携]
「2025日本史はらべ考(おなかがへったら歴史が動いた)第二弾」
(作・演出:今野和弘) 4月12日(土)～13日(日)(3回公演)
- 三島由紀夫「招魂の賦」札幌公演実行委員会(東京) [提携]
「本多菊雄 独り芝居 三島由紀夫「招魂の賦」」
(作:本多菊雄、坂井勝生 演出:川口典成) 4月25日(金)～27日(日)(4回公演)
- 坪川拓史全作品上映in札幌(札幌・室蘭) [企画]
(監督:坪川拓史) 5月5日(月)～11日(日)(15回上映)
- SPR実行委員会(大阪) [提携]
「最強の一人芝居フェスティバル北海道版「INDEPENDENT:SPR25」」
5月17日(土)～18日(日)(4回公演)
- 劇団 風蝕異人会(札幌) [常連ZOO]
「岸田理生アバンギャルドフェスティバル「リア」」
(原作:岸田理生 構成・演出:こしばきこう) 5月23日(金)～25日(日)(4回公演)
- シアターZOO 次世代共創プログラム(札幌) [次世代ZOO]
ワークショップ公演「サムライヌード」
(共催:札幌ハムプロジェクト) 6月12日(木)～15日(日)(8回公演)
- 大人の事情協議会(札幌) [提携]
「屋根の上の白い猫 ～ヘンゼルとか、グレーテルとか?～」
(作・演出:長岡登美子) 6月20日(金)～22日(日)(5回公演)
- MAM(東京) [提携]
「ドアを開ければいつも」
(作:阿藤智恵 演出:増澤ノゾム) 6月26日(木)～29日(日)(8回公演)
- waqu:iraz(東京) [はじめてZOO]
「Trio」
(演出・振付・脚本構成:小林真梨恵) 7月5日(土)～6日(日)(4回公演)
- シアターZOO 次世代共創プログラム(札幌) [次世代ZOO]
「鐘下辰男俳優ワークショップ」
(共催:劇団清水企画) 7月12日(土)・8月26日(火)～27日(水)(3日間)
- シアターZOO 次世代共創プログラム(札幌) [次世代ZOO]
「劇のたまごを割ってみよう 音楽劇「雪の女王」ワークショップ+発表会」
8月18日(月)～24日(日)(7日間)
- 虚空旅団(大阪) [提携]
「Voice Training 2025」
(作・演出:高橋恵) 8月30日(土)～31日(日)(2回公演)
- ru企画(札幌) [企画]
「朗読試演会」
9月19日(金)(1回公演)
- 入江雅人プレートー人芝居(東京) [企画]
「北海道のパンクスタイル」
(作・演出:入江雅人) 9月20日(土)～21日(日)(3回公演)

《シアターZOO一般貸出》

5団体 26日間

『演劇支援自動販売機』にご協力を!

2011年から北海道キリンビバレッジ株式会社様と連携し、「演劇支援自動販売機」による演劇支援を行っています。自動販売機を気軽に利用して頂くことで、北海道・札幌の演劇を応援! 売り上げの一部が当財団の演劇振興事業推進に使われています。現在、市内6か所に設置されています。

《設置協力社一覧》

- ・アクトコール株式会社
- ・キャトレール中島公園
- ・北海道文化放送株式会社
- ・株式会社ノヴェロ
- ・社団法人孝仁会 心臓血管センター 北海道大野病院
- ・北海道テレビ放送株式会社

(敬称略)

よろこびがつく世界へ
KIRIN

午後の紅茶®
おいしい無糖

おいしい無糖
アイスティー
午後紅茶
無果汁

GOGO-TEA.jp のんだあとにはリサイクル。

北海道キリンビバレッジ株式会社

公益財団法人北海道演劇財団にご支援をお願いします。

北海道演劇財団は、民間による演劇に特化した財団法人として、演劇で北海道の文化芸術を活発にし、道内各地で上質な舞台芸術に触れる機会を飛躍的に増やしてまいりました。今後もこれまでの活動に加え、未来を担う子どもたちや、地域で暮らす皆さんに、表現・創造・出会いの豊かさを伝える取り組みを拡げ、北海道にとって、演劇が必要不可欠な存在であると実感できるための事業を、さらに推し進めてまいります。なにとぞ、皆さまからのご支援を、お願い申し上げます。



ご寄付によるご支援

ご寄付は、税制上の
優遇措置が受けられます。

法人および個人のご寄付の場合、優遇措置を受けるには確定申告の届け出と「寄付金受領書」(本財団発行)の添付が必要です。
ご寄付に関する詳細と、「寄付金お申込書」のダウンロードは、ホームページをご覧ください。事務局までお問い合わせください。

<http://www.h-paf.ne.jp/support/>

QRコードからは
コチラ



ご協賛・ご後援によるご支援

オフィシャルパートナーとして
ご支援を、お願いしています。

特別支援団体 年額／1口 50万円

- 広報紙「H-PAF NEWS」に貴団体の広告を掲載させていただきます。
- 劇場ロビー、広報紙、ホームページ、当財団が主催する公演のチラシ、劇場受付に掲示するパネルに貴団体のお名前・ロゴを掲載させていただきます。
- 当財団が主催する公演にご招待させていただきます。

協賛団体 年額／1口 5万円

- 広報紙「H-PAF NEWS」に貴団体のお名前を掲載させていただきます。
- 劇場受付に掲示するパネルに貴団体のお名前・ロゴを掲載させていただきます。
- 当財団が主催する公演にご招待させていただきます。

後援会会員 年額／1口 3万円

- 広報紙「H-PAF NEWS」に会員様のお名前を掲載させていただきます。
- 当財団が主催する公演のご案内を送付させていただきます。

ご寄付・オフィシャルパートナーについてのお問い合わせ、お申し込みは下記までご連絡ください。

公益財団法人北海道演劇財団 TEL.011-520-0710 E-MAIL office@h-paf.ne.jp

〒064-0811 札幌市中央区南11条西1丁目ファミール中島公園1F FAX.011-520-0712

NPO 法人 札幌座くらぶ 会員募集中!

札幌座くらぶは、観劇し続けることで楽しみながら演劇を応援する団体です。札幌座の他、シアターZOOのラインナップなど、厳選した作品をお楽しみ頂けるほか、サロンの会など俳優・演出家たちとの交流イベントも盛りだくさんです。

年会費／一般:14,000 円／学生:10,000 円／高校生以下: 7,000 円
お申込み・お問い合わせ TEL:011-522-6222 Mail:club@h-paf.ne.jp

特別支援団体

岩本・佐藤法律事務所	(株)北洋銀行	北海道テレビ放送(株)
ホクレン農業協同組合連合会	(株)北海道新聞社	(株)あいプラン

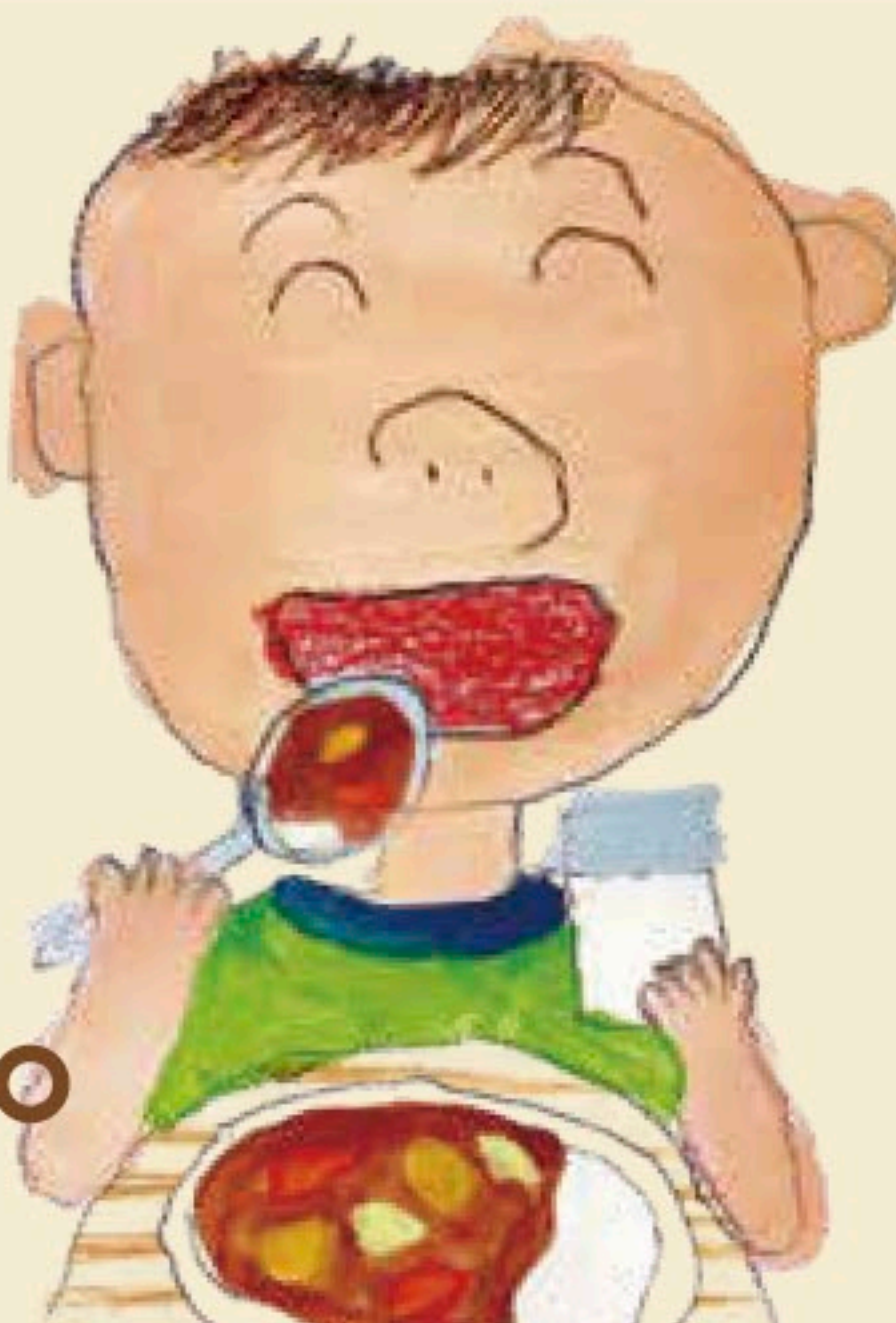
協賛団体

岩田地崎建設(株)	(株)じょうてつ	(株)ほくていホールディングス
柿崎歯科	創価学会	北海道麒麟ビバレッジ(株)
(株)エヌケイウオッシュ	(株)創文	
(株)クリエイティブオフィスキュー	フルテック(株)	

後援会会員

(株)アイフードコーポレーションTAMIS	(特非)札幌座くらぶ	(株)東翔
秋山不動産(有)	札幌テレビ放送(株)	(株)トップシーン札幌
アクトコール(株)	(株)サン設計事務所	(株)ノックアウト
HTB映像(株)	スタジオコパン	(株)富士メガネ
特定医療法人社団慶愛会札幌花園病院	(株)ステージアンサンブル	北海道ガス(株)
(株)HTBプロモーション	セイコーマートながい	北海道文化放送(株)
NPO法人音更町文化事業協会	(株)ダブルス	北海道放送(株)

おいしい
顔って、
無敵なのだ。



おいしいものを食べて弾ける、この笑顔。
これこそ、世界共通のシアワセ、ゼッタイ最強！
ホクレンもこの笑顔をめざして北海道の農畜産物をお届けしています。
北海道のおいしさには、雪がもたらす豊かな水と、爽やかな夏、
昼夜の寒暖差のある気候と、どこまでも続く大地。
そして、農家さんの情熱が、ギュッと詰まっているんです。
さあ、安全でおいしい

北海道を食べて、
シアワセになろう。



つくる人を幸せに、食べる人を笑顔に



ホクレン

いつでも、どこでも、あなたのそばに。

北洋銀行
www.hokuyobank.co.jp

